News letter
J.S.D.P.——日本発達心理学会

発行：日本発達心理学会
事務局 東京都調布市緑ケ丘1-25/〒182
白百合女子大学内
電話03-3326-9417(直)
FAX 03-3326-9417
RGD 02662@niftyserve.or.jp

編集：広報委員会
事務局 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15/〒359
早稲田大学人間科学部青柳研究室内
電話0429-47-6813
FAX 0429-47-6806
kkawano@human.waseda.ac.jp

目　次

＜特集：電子ネットワークで心理学を＞
・電子ネットワークで心理学を …… 向後千春 1
・wwwサーバと心理学：これからの可能性 …… 岡田努 3
・メーリングリストで情報交換 …… 岡本真彦 3
・電子ネットワークを用いた情報の収集 …… 成田健一 4
・電子メールやりとりの危うさ …… 伊藤哲司・新谷和代 5
＜留学体験記＞
・雪と桜のメリーランド …… 荻野美佐子 6
＜研究余滴＞
・行動遺伝学者の身の処し方 …… 安藤寿康 7
＜研究室紹介＞
・福岡教育大学心理学教室 …… 杉村智子 8
＜分科会・地域懇話会報告＞
・老年発達研究会 …… 高山緑 9
＜学会・研究会報告＞
・第6回乳幼児医学・心理学研究会印象記 …… 小林隆児 10
・科研重点領域「認知・言語の成立」に参加して …… 常田秀子 11
＜学会からのお知らせ＞
・資格問題特別委員会報告 …… 藤永保 12
・研究者倫理を考えるワーキンググループ発足 …… 古澤頼雄 13
・“コード”を越えて－編集規定への「研究者倫理に関する規定」の追加について …… 長崎勤 13
・1997年度発達研究国際セミナー開催のお知らせ …… 伊藤・大竹 14
・企画委員会からの報告 …… 安藤寿康 15
・学会ホームページの開設 …… 谷口篤 15
・年会費値上げについて …… 東洋 16
＜編集後記＞ …… 16

＜特　集＞

電子ネットワークで心理学を

電子ネットワークは，私たちの研究活動にとって身近なものになりつつあります。97年の第8回大会ではインターネットの講習会が開かれ，あるいは学会のホームページも開設されました（＜学会からのおしらせ＞をご参照ください）。しかし，知ってる人は知ってても，苦手の人は関わりたくないのがこの世界。そこで5組のかたに電子ネットワークへの案内役をお願いして，その利点やあやうさについて「わかりやすく」語っていただきました。

特集：電子ネットワークで心理学を

富山大学教育学部　向後　千春
(kogo@edu.toyama-u.ac.jp)

この文章をアメリカで書いています。短期の在外研究で一ヶ月半の滞在なのですが，ネットワークのおかげで日本の自分のアドレス宛に届いている電子メールもアメリカから読むことができます。そうしてこんなふうに原稿を電子メールで送ることもできます。

テレビでCNNのチャンネルをつけっぱなしにしておくと，頻繁にインターネット・プロバイダの宣伝がありますし，また直接インターネットに関係ない会社の宣伝でも必ずと言っていいほどホームページのアドレスが示されています。アメリカではネットワークが当たり前になっているようです（それでも3割から4割のアメリカ人はコンピュータが苦手だと伝えられてい

は勉強会の内容もさることながら，私と同じように老年心理学に関心を抱いている他大学・大学院の友人と交流でき，刺激しあえることもこの会の魅力となっています。

教育講演会は年に1回のペースで，やはり東京都老人総合研究所を会場として行われています。第1回目の教育講演会ではこれまでの老年研究を振り返り，今後の研究を考えるという主旨のもとに，長嶋紀一先生（日本大学）に「老年研究の歴史と展望」と題して講演していただきました。今まで講演をしていただいた先生方と演題は以下の通りです。第2回目：柄澤昭秀先生（聖徳大学）「痴呆の科学」，第3回目：詫摩武俊先生（東京国際大学）「我が国の老人研究をめぐって」，第4回目：岡堂哲雄先生（文教大学）「老年期の家族」，第6回目：長崎浩先生（東京都老人総合研究所）「高齢者の運動能力ー生涯発達的観点からみた身体的活動」。今年は5月24日に，昨年度までミシガン大学で老年学の研究に携わっていらした秋山弘子先生（東京大学）より，米国の老年学研究の最新の動向について講演していただけると伺っており，今からとても楽しみにしています。

老年心理学に興味・関心をもち，研究をしたいと思いながらも，大学では老年心理学に関連する授業はまだまだわずかです。また，なかなか他大学・大学院や研究所の方たちと交流し，意見を交換する場も少ないのが現状です。しかし，その中で老年発達研究会は老年学研究，生涯発達心理学研究の先端に触れることができ，老年心理学を学ぶ上でとても貴重な場となっています。このように感じているのは私だけでないことは，勉強会や講演会は今のところ全て都内での開催されているにもかかわらず，時には関西や東北地域の方も参加なさることがあることをお伝えすれば十分でしょう。

今は“学ぶ場”としての機能が中心ですが，将来的には，老年発達研究会のメンバーと協同研究をしていくようなこともできたら，と期待しています。

＜学会・研究会報告＞

第6回乳幼児医学・心理学研究会印象記

東海大学健康科学部　小林　隆児
(ryuji@is.icc.u-tokai.ac.jp)

乳幼児医学・心理学研究会は，精神科，小児科などの医学領域と心理学領域の研究者を中心にして結成された研究会であるが，発達と臨床についてもっと学際的に討論できる場を持ちたいという共通の願いを持ってきた。今回は6回目を数え，東京女子医科大学臨床講堂で原 仁 会長（国立特殊教育総合研究所）のもとで開催された。参加者は100名余り。発表演題数は15。発表内容をテーマ別にみると，自閉症関連がもっとも多く7題。乳幼児精神保健関連2題，乳児院関連2題，母親の抑うつと愛着関係1題，低出生体重児と親との関係性1題，その他であった。

多い領域別に見ていくと，発達障害臨床などでは乳幼児期の問題が常に念頭にあるために，実際の対象年齢はかなり幅広い。学齢児の自閉症を対象とした発表がいくつかあった（木暮美香ら：自閉症児における対人行動と社会適応行動の関係についての一考察；杉山登志郎ら：正常知能広汎性発達障害における「いじめ」への対応）。乳幼児期のものでは，自閉症同胞例の乳幼児検診（高橋脩：自閉症年少同胞の乳児期からの継続検診の意義について），乳児期の初期徴候（渥美真理子ら：乳児期に異なる初期徴候を示した自閉症2症例の発達経過）と乳幼児期の自閉症への早期介入（白石雅一ら：自閉症治療における情動的コミュニケーションの進展過程に関する研究ー第4報；石垣ちぐさら：同第5報；中澄襟子ら：Mother-Infant Unitにおけるビデオ・フィードバックの効用について）などがあった。小児科領域では，難治性てんかん（林　隆：片側巨脳症に起因する難治てんかんに認めたparadoxical normalization），乳幼児の事故と家族（塩川宏郷ら：山間部における乳幼児の事故と家族機能）など。

乳幼児の精神保健は本研究会の大きな中心的テーマのひとつであるが，子どもの側の要因と養育者側の要因の問題によって両者の関係性の発達がどのように展開するのか，いくつかの臨床現場からの報告があった（永田雅子ら：産褥期の母親の抑うつと子どもへの愛着（1）ー満期産正常児の母親を対象にー；橋本洋子：低出生体重児と親との関係性の発達ーＮＩＣＵにおける心理的援助へ向けてー）。その他には妊娠と母子保健（福井知美ら：乳幼児の精神保健に関する研究ー望まない妊娠で生まれた児と母親の精神保健），乳児院関連（千坂克馬ら：乳児院入所児への発達援助（1）脳性麻痺の疑いのある乳児に対して；立元真ら：乳児院入所児への発達援助（2）被虐待を理由として入所した子どもの例），ちょっと変わったところでは最近の話題となったO-157の問題（長尾圭造ら：堺市病原性大腸菌O-157集団発症における通園施設のメンタルヘルス対応）などであった。

昼休みをはさみ相前後して，フリージャーナリスト椎名篤子氏による特別講演「子ども虐待を考えるージャーナリストの立場から」，渡辺久子氏による教育講演「母

子関係の病理」が行われた。椎名氏は，ご自身の著作を原作とした虐待に関する漫画の連載が大反響を呼び，それが契機となって現在では「子どもの虐待を考える会」を主宰されているという異色な方であった。日頃聞く研究者の講演と違った迫真性をもつ講演で大好評であった。渡辺氏は昨今の乳幼児精神医学研究の最新の知見を交えながら，乳幼児とその養育者を取り囲む望ましい環境をいかにしてわれわれは取り戻さなくてはならないか，豊富な臨床経験を基にした熱い思いを交えながらの感動的な講演であった。

おそらく読者はお気づきのことと思うが，本研究会は当初発達心理関係者と臨床家らとの学際的交流を目論んで創設されたのであるが，今回は発達心理研究関連の発表を聞くことができなかった。あまりにも臨床関連の色彩が強すぎて抵抗があるのか，医学関連領域との共通言語がいまだ未成熟であるためなのか，医学関連の発表内容に発達の軸がいまだ不鮮明であるのか，どうも理由は判然としないのではあるが，なんとも寂しい限りである。若い学徒がこの研究会で発表され，臨床の世界に刺激を与えていただければと願っている。

次回第7回大会は筆者が会長を仰せつかり，平成9年12月6日（土）に東海大学健康科学部（伊勢原校舎，東海大学医学部附属病院と同じ敷地内）にて開催される予定である。発達研究と臨床研究のさらなる接近と統合を願って，特別講演を鯨岡峻氏（京都大学大学院人間環境学研究科教授）にお願いし，「関係発達論と原初的コミュニケーション」について話していただくことになっている。発達心理学会の会員諸氏のご参加を願ってやまない。

問い合わせ先：
東海大学健康科学部社会福祉学科　小林隆児
〒259-11 神奈川県伊勢原市望星台
FAX 0463-90-2073　TEL 0463-90-2034

科研重点領域「認知・言語の成立」に参加して

東洋大学　常田　秀子
(PAH01705@niftyserve.or.jp)

重点領域研究「認知・言語の成立」は京大小嶋祥三先生を領域責任者として，平成5～8年度の4年間にわたり実施されました。この間「認知の発達」「環境と交互作用の発達」「音声と音声言語の発達」の3つの班に分かれ，認知・言語の成立について，動物研究・発達研究・病理学的研究など多様な側面からの研究が行われました。私は，無藤隆先生の研究分担者として「自己および他者理解の発達と語彙獲得の関連性」という研究に参加させていただくこととなり，重点領域研究というものに，初めて関わらせていただきました。今回，ニューズレター委員会から，このような重点領域研究で発達に関する研究交流があったことを紹介するというテーマがだされ，私のような末端分担者からの報告や感想も意味があるかと思い，報告させていただくことになりました。

この重点領域では，毎年1，2回のシンポジウムや研究成果報告会が行われました。昨年度は，9月に国際シンポジウム "The Emergence of Human Cognition and Language"，10月に「大学と科学」公開シンポジウム「認知・言語の成立ー人間の心の発達」，1月に研究成果発表会が開催されました。

9月の国際シンポジウムでは，言語発達研究の分野の大御所であるElizabath Bates先生，音声発達研究で著名なD. Kimbrough Oller先生，霊長類や乳児のコミュニケーション発達研究で知られるMichael Tomasello先生など十数名の海外の研究者が招聘され，活発な議論が展開されました。このシンポジウムは，議論内容はもちろんのこと，海外の研究者の活発なやり取りの様子や，日頃文献で名前を知っている著名な研究者の迫力や雰囲気をじかに感じられて，とても印象強いものでした。非常に充実したプログラムだったにもかかわらず研究班のメンバー以外の参加者はあまり多くないようであり，もっと多くの人が参加できればと，大変もったいなく感じられました。また10月のシンポジウムでは，この研究班の主要なメンバーにより専門外の幅広い聴衆に向けて，最新の研究成果を踏まえた平易ながら質の高い発表が行われ，好評を博したとのことでした。いずれの機会も，学会などとは異なり，言語・認知発達分野の第一線の研究者が一同に集まったことから，情報交換や研究交流などもでき，とてもいい機会となりました。

この研究班で報告された研究は非常に多く，研究班全体の成果を一言で表現することは，私の能力を超えています。しかし，動物，類人猿，健常乳児，未熟児，発達障害児，脳損傷者などを対象に，通常の実験や調査研究のみならず交差言語研究などさまざまな方法で行われた研究は，いずれも，従来から言語発達の議論の焦点となってきた，生得性・領域固有性・脳における局在性などの問題に直接間接に関連しているように感じられ，それぞれの論点に対する実証的な証拠の厚みはいよいよ本格的になってきたという実感を得ることができました。私個人にとっても，日頃，発達という視点だけから認知・言語を考えることが習慣になってしまっている分だけ，それ以外の視点からの最新の言語研究に触れることができたのは大きな刺激でした